



Title	急進民族主義と改良運動：帝政ドイツにおける知識人と近代化
Author(s)	竹中, 亨
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1995, 29, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48040
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

急進民族主義と改良運動

— 帝政ドイツにおける知識人と近代化 —

竹 中 亨

1 はじめに

ドイツ史における「近代」は、西欧諸国の場合に比べて、はるかに陰鬱に満ちている。それは、ドイツ史の歴史的歩みを顧みる現代のわれわれにとってそうだというだけではない。同様に、同時代のドイツの知識人にとっても、近代は何らかの留保ぬきには向き合えないものであった。たしかに、なかには近代化のもたらした果実、とりわけ国民国家の形成と目覚ましい経済成長に諸手を挙げて歓呼した人々も少なくなかった。しかし、彼らでさえも、ドイツのそうした発展を「近代」という語で一括りにするのには、強いためらいを覚えた。とりわけ、そこに英仏などの西歐的な含意があれば、いっそうのことであった。他方で、帝政期の社会的現実に対して、これよりはるかに拒否的な姿勢を貫いた向きもあった。その中で社会主義に傾いたのは、一部の例外的な人々とどまったけれども、ともかく、こうした人々の目には、帝政期のドイツはただ否定すべき対象としか映らなかつた。つまり、理念を実現する好機を逸し、あるいは退廃と墮落にただ身をまかせている唾棄すべき社会でしなかつたのである。

本稿では、近代に対するドイツの知識人の反応形態として、急進民族主義と改良運動を取り上げる。両者は、今述べた二つの立場のうち、第二の全面否定的な姿勢に属するものである。とくに急進民族主義と改良運動に注目するのは、二つの理由がある。第一に、反近代志向という意味から、

知識人と近代の陰の部分との関連が両者において、よりはっきりと浮かび上がってくることである。とくに急進民族主義の場合、後のナチスとのつながりは、それだけでも歴史的関心に値する。第二に、この両者に共通する特質を通じて、現代史におけるイデオロギーの「ねじれ」とでも言うべき現象に、若干の光をあてることができると考えるからである。

帝政期の知識人全体から見れば、急進民族主義と改良運動を担った人々は、疑いなく少数派であった。それにまた、この二つでもって、近代に全否定的な反応形態が網羅されるわけでもなからう。しかし、当然ながら、数的規模が歴史的な意義を決定するとは限らない。両者は、帝政期の知識人のあり方を浮き彫りにするうえで格好の素材なのであり、それを通じてドイツの政治文化をめぐる、一つの仮説的なデッサンを提示することが本稿の意図である¹⁾。

急進民族主義は、しばしばフェルキッシュ *völkisch* 運動とも呼ばれる²⁾。この運動の主張するところは、思想家によってかなりの幅があり、また往々にして論理的脈絡を欠くので、要約的に紹介するのは簡単でない。ともかく、その主要な論点を取りあえず脈絡なしに列挙してみよう。すなわち、激越なナショナリズム・対外膨張路線、人種論と反ユダヤ主義、身分制的（あるいは職業身分制的）社会観、民族共同体の平等主義、反都市主義と田園志向・農本主義、「文明」の否定と「文化」の高唱、「ゲルマン的信仰」、戦争や暴力の倫理化、尚古主義、行動主義、機械論や物質主義の否定といった論点である。この論点のリストは、決して網羅的なわけではないが、これらの論点を多少とも共有する一群の思想・運動を急進民族主義と考えてよいだろう。第一次大戦後、急進民族主義は勢力を伸ばし、多数の組織が簇生した。ナチスも、そうした大きな流れの中から生まれてきた運動であった。このように、急進民族主義が全面的に開花したのは、たしかにワイマール期に入ってからのことである。しかし、思想・運動と

しての形姿が固まってくるのは、すでに帝政期においてのことであった。

一方、改良運動については、これまであまり紹介されていない³⁾。本稿で言う改良運動とは、世紀交替期前後に活発化した、文明批判的傾向をもった種々の運動の総称である。具体特には、生活改良運動 *Lebensreformbewegung*、青年運動、さらに文化・芸術面での革新運動を含んでいる。本稿では、そのうち生活改良運動に比重を置いて考察を進めるが、生活改良運動自身が、さらに種々の運動に細分化される。たとえば、土地・住宅改革、反アルコール運動、衣料改革、反種痘運動などである。しかし、その中でとくに重要なのは、菜食主義 *Vegetarismus*、自然療法 *Naturheilkunde*、裸体運動 *Nacktkulturbewegung* であり、とりわけ菜食主義が中核的な部分をなしていた。生活改良運動は、類縁関係にあった諸運動と、全体として一個の運動をなしていた。たとえば、青年運動、表現ダンス運動、教育改革運動、民衆芸術運動、郷土保護、人知学 *Anthroposophie* などである。本稿ではこの全体を改良運動と呼ぶわけである⁴⁾。

このように、急進民族主義も改良運動も、思想体系としての明確な輪郭を欠いていた。したがって、これらを考察する場合には、どうしても方法的に一定の限定を加えざるをえない。つまり、歴史上実際に存在した両者の個々の事例をある程度捨象して、何らかの理念型を想定するという手続きが不可避なのである。以下の本稿の論述も、こうした限定を免れることはできない。

さて、通念的な理解からすれば、この二つの運動は結びつきにくいものである。あるいは、対極的なものと考えられていると言ってもよい。というのも、急進民族主義が、右翼陣営の急先鋒を務めたものだったのに対して、改良運動は、一般にエコロジー運動と密接な関係にあり、それゆえに政治的には「左」のイメージで捉えられているからである⁵⁾。対極的とまでいなくても、両者を基本的に異質と見るのが、従来の平均的理解と言

えよう。近代ドイツの右翼思想史についての古典的研究でも、前者は帝政体制を原理的に否定するものと理解されているのに対して、後者は、体制の枠内での改良を目指したものと評価されている⁶⁾。しかし、以下に見るように、両者の間には意外なほど密接な関係があった。両者は、しばしば人的な面で重なりあっていし、さらに思想面・イデオロギー面でも強い共通性をもっていたのである。

2 イデオロギーとしての構造

まず、イデオロギーとしての両者の特質を考えてみよう。

第一に、両者はその成立の動機という点について言えば、帝政ドイツ社会の現実に対する強い幻滅と反発を共通の特徴としていた。急進民族主義者からすれば、ビスマルク帝国は未完の国民国家でしかなかった。その第一の理由は、1871年の統一が「大ドイツ」的路線を放棄したうで遂行されたという点にあった。そのため、オーストリア内のドイツ人をはじめとして、多くの民族同胞が、国民国家の枠組に包摂されないまま、国境の外に置き去りにされたのである。さらに、彼らの目には、帝政社会は経済の急速な発展のなかで、ひたすら拝金主義的風潮を強めるばかりのように映った。つまり、理念的なものを軽視する物質主義文明が蔓延する一方、民族の活力は損なわれ、またドイツ人としてのアイデンティティは失われつつある。その結果、統一が生むはずだった、本当の意味での国民意識は形成されないままに終わっているというのであった。加えて、貧富の格差の拡大や社会問題の発生は、市民層と労働者など社会下層との間に深い溝を生み、国民の団結を弱めるものと受け取られたのである。

一方、改良主義者も、帝政社会に見られる工業化・都市化の悪弊への反発を動機にしていた。つまり、都市における生活環境は、人口過剰、住宅の劣悪さ、大気汚染など、著しく悪化している。それが、人々の肉体的衰

弱を生み、さらには道徳的腐敗をもたらしているというのである。こうした悪弊こそが、すなわち社会問題の根源であり、それに対処するには、健全な自然への回帰を進めるしかないというのが、生活改良の考えであった。さらに第二の動機としては、近代化に伴う社会の全般的な科学化・合理化傾向への反発があった。都市の大衆社会の中で、人々は原子化され、匿名化される。そうして個人の生が社会機構の歯車の中に埋没してしまうことに、彼らは深刻な実存的な危機を感じたのである。

帝政期の社会的現実への両者の批判は、反近代主義的な傾向をはっきりと窺わせる。両者の指弾したのは、以上述べたところから明らかなように、帝政社会の中での近代化の所産たる局面であった。

第二の特徴として指摘できるのは、こうした「現代の墮落」に、彼らがそれぞれ、唯一絶対の原理を対置しようとしたことである。急進民族主義者の場合、それは「民族」Volk であり、改良主義者の場合、それは「自然」Natur であった。この場合、「民族」とは決して、共通の文化的背景をもつ個人の総和などではない。急進民族主義者の言う「民族」とは、宇宙と個人を媒介する存在であり、人間を生の力で満たすものであった。また、社会全体の秩序もその中で整序され、活性化されるはずであった。改良主義者にとっての「自然」も、同様の絶対的な価値を含んだ言葉であった。そこへ回帰することは、根源的に病んだ現代の人間と社会を癒す唯一の道であった。「自然」とは、ある改良主義者の言葉を借りれば、「真実と徳、健康と至福」以外の何物でもなかったのである⁷⁾。

その意味で、「民族」にしても「自然」にしても、醜悪な現状を照らし出し、それを批判するよすがとなる理想であった。ただ、注意したい点は、この二つが、単なる一般的な意味での理想ということにとどまらない、特徴的な側面もっていたことである。普通、理想はそれが高邁であればあるほど、実際には永遠に到達不可能で、超越的な性格を備えるようになる。し

かし、「民族」も「自然」も、そういう意味で到達不可能ではなかった。というのは、急進民族主義者も改良運動家も、これを「喪われた理想」だと理解していたからである。すなわち、双方とも人間の遠い過去には、一度実現したものであった。ところが、人間はその至福を、近代化という墮落によって喪ってしまったのである。

つまり、両者にとっての理想的な社会は、遠く隔たった過去にこそ見出されるものであった。急進民族主義者にとっては、それは原始的精気に満ちた古ゲルマンの社会であった。そして改良運動家は、人間が母なる自然の懷に抱かれて生活していた前近代の牧歌的社会を夢想したのである。このように、両者の思考では、過去へのベクトルが顕著な特徴となっている。

こうした思考パターンは、原理主義に特徴的なものと考えられる。つまり第一に、過去のある時期に、何らかの絶対的な価値が人間社会に実現していたと信じる点である。第二の特徴として、その価値は現代ではすでに喪われてしまったと考えられている。というのも、その間に人間が「墮落」したためである。第三に、それを改めて発掘して、掘るべき原理として据えなおそうとする姿勢が認められる。こうして、過去の原理は再生し、何より現代の墮落を強烈に指弾する原点となるのである。原理主義においては、言うまでもないことだが、その絶対的な価値が過去においてほんとうに存在したかどうかは、さしあたり別問題である。また、過去の原理の発掘の際に、一面的な美化や理想化が入り交じるのも当然であった。その再生にあたって、とにかく醜悪な現実を批判するという目的に沿った強引な解釈が施されるのも、またありがちなことであった。しかし、とにかく、過去志向が単なる復古主義に終わらず、現状批判という契機を託されるという点で、原理主義のイデオロギー機能がこの両者には認められるのである。

第三に、両者には、疑似宗教的な色彩が認められる。そもそも、原理主

義は終末論的歴史観に馴染みやすい。「喪われた楽園」を現代の混沌に対置するという発想は、必然的に「楽園→墮落→救済」という歴史観に傾くからである。こうして、「民族」や「自然」の再生が此岸の救済のイメージと重なってくると、両者は疑似宗教的な機能をもつようになる。実際、急進民族主義については、すでに説得的な論証がある。野田宣雄は、急進民族主義を「教養市民層」Bildungsbürgertum の疑似宗教だったと断じている⁸⁾。あるいは、第一次大戦開戦時のドイツ知識人の心情も、同じく傍証になろう。彼らにとっての戦争の到来は、単なる政治的・軍事的次元の事柄に終わらなかった。巨大な運命に身を委ねるときのように、静謐さを伴った悲壮感と並んで、解放感の入り交じった一種の安堵を、彼らは感じたのである。こうした感覚を、トレルチ Ernst Troeltsch は「ドイツは祈りを捧げる」と言い表し、詩人のビンディング Rudolf Binding は、「大いなる帰依」と呼んだ⁹⁾。こうした開戦時の知識人の心情の背景には、帝政社会の閉塞した時代状況への倦怠と、そこからの脱却を待望するメンタリティが潜んでいた。その意味で、彼らが大戦を正当化して高唱した「1914年の理念」は、まさしく「1914年の黙示録」なのであった¹⁰⁾。

一方、改良主義者も、救済宗教的な自己意識をもっていた。たとえば、生活改良運動は、個々の社会的問題の是正を単に企図するだけの世俗的な実践的改良運動ではなかった。それは何よりも、人間の全的救済という至高の目標を実現するための手段なのであった。生活改良は、自然への回帰という啓示であり、同時にそれへといたる唯一の、そして万能の方策であった。こうした意識は、彼らの言語にも明瞭に表れている。すなわち、ある菜食主義の理論家によれば、「菜食主義は救済であり、菜食主義は至福である。……菜食主義は実現された彼岸であり、……神によって約束されたメシアであり、あらゆる願望の充足であり、そしてあらゆる悪からの解放である。」¹¹⁾

さらに、両者の運動に宗派（セクト）的性格がつきまとうのも、特徴的である。急進民族主義の組織原理は一般にエリート主義的で、組織の規模も数百人程度のレベルを越えることはなかった。こうした組織原理が高じると、一部でコミュニオンを建設しようとする試みが生まれた。つまり、外部との接触を絶った閉鎖的な共同体において、自給自足の下で一つの家族のような共同生活を送ろうというものであった。たとえば、ヘンツェル Willibald Hentschel の設立したコミュニオン「ミットガルト」Mittgart などはその好例である。彼はここで、貨幣を廃した原始的経済生活の中で、ゲルマン的アイデンティティの涵養を進めつつ、さらに一夫多妻制によって純粋なアーリア人種を培養・育成しようとしたのである¹²⁾。

改良運動でも、活動家は目覚めた選良であり、道徳的な高みにあると考えられていた。彼らは信徒の共同体に団結し、外の蒙昧の世界から自己の道徳的純粋さを守らねばならなかった。このように、一方で自己の教理を唯一絶対化する一方、彼らは他の運動・教理を厳しく排斥した。こうして、改良運動のもつ宗派的性格が生じた。改良運動でもコミュニオン建設の試みがしばしばあった。比較的良好に知られているものとしては、1893年に設立された共同体「エデン」Eden がある。これは土地を共有し、果樹栽培を軸にして、菜食主義など生活改良運動の理念に沿った健全な生活の場を作ろうとしたものであった¹³⁾。同時に、こうしたコミュニオンの試みは、両者の運動のもつエキセントリックな一面を覗かせている。そこには、宗教的信条に往々にして付随する、悲観主義と楽観主義の奇妙な結びつきを垣間見ることができるような気がする。つまり、一方における現在の社会の「病んだ」現実とその将来への深い悲観と、他方での、原理の再生が実現しさえすれば、救済は間違いなく可能なのだという楽観的確信である。

第四に、原理主義イデオロギーにしばしば見られることであるが、急進民族主義も改良運動も、政治的に両義的な側面をもっていた。つまり、政

治的立場を左右の尺度で理解するという図式的手法では、両者は十分には把握できないのである。もちろん、一般論として言えば、急進民族主義は周知のように、圧倒的に右翼への傾きをもっていた。逆に、生活改良運動は、大勢としては民主的志向をもち、その主張は急進的あるいは左翼的であったと評価されている。

しかし、子細に見れば、こうした単純な割り切り方からはみ出す部分は、あまりに大きい。若干の事例を挙げてみよう。改良運動の一つ、田園都市運動の著名な活動家フリッチュ Theodor Fritsch は、同時に帝政期の反ユダヤ主義運動の中の大立て者であった。彼は反ユダヤ主義勢力の大同団結に尽力し、その著書は、後のナチスにいたるまで反ユダヤ主義者のバイブルとなった¹⁴⁾。さらに、ある裸体運動の団体が掲げた綱領は、ほとんどナチスの人種政策そのままと言ってよい。たとえば、子孫の遺伝的変性を防止するため、精神病患者、性病患者、犯罪者等を去勢するとか、民族の純潔を維持するため、ゲルマン人種と他人種との婚姻を禁止し、劣等人種の入国を禁止するとか、あるいはさらに、ゲルマン人種の改良のため、金髪・碧眼の育成政策を実施するなどの項目が掲げられているのである¹⁵⁾。

一方、急進民族主義の場合についても、そこに一種の反資本主義的要素が認められることは、すでにナチズム研究との関連でよく知られた事実である¹⁶⁾。さらに、巨視的に見れば、急進民族主義を支える最大の思想的要素たるナショナリズムそのものが、歴史の中で左から右へのねじれを経験したことも挙げておいてよいかもしれない。つまり、19世紀前半には解放イデオロギーとして自由主義と手を携えたナショナリズムは、帝政期に入ると抑圧と膨張のイデオロギーへと「機能転換」したのである¹⁷⁾。つまり、ナショナリズムもまた、政治的には両義的だったわけである。

このように、両者の中には政治的に相矛盾するような要素が含まれていた。したがって、両者には本来、どのような政治的志向が内在していたか

を問うことは困難である。それを一義的に決めつけようとしても、こぼれる部分はあまりに多い。したがって、両者の内在的論理なり、あるいは本来的性格を捉えようとするより、むしろ状況論の枠組の中でアプローチするほうが適当である。つまり、両者が現実の政治の中で、結果としてどのような立場をとるかは、それぞれに内在する方向性よりも、むしろその時々置かれた政治状況の脈絡に左右される面が大きいと考えるべきではないだろうか。

以上、急進民族主義と改良運動の相似を見てきた。両者が現実の運動としては、たがいに接点をもつことは、これまでもおりおり指摘されてはいた。本節の説明で、それがイデオロギーとしての構造面での共通性に由来していることが確認できたと考える。

3 社会学的背景

次に、イデオロギーと現実の社会の接点という観点から、急進民族主義と改良運動を考察してみよう。

まず両者の運動の担い手については、共通の特徴が指摘できる。第一に、階層・集団という点から言えば、それは知識人層であった。両者の反近代主義的傾向は、たしかに旧中間層などの伝統的な階層・集団にもアピールしたが、総じて言えば、運動の中核をなしたのは知識人であった。たとえば、急進民族主義に「没入したのは教養ある市民層だった。運動に参加した階層のなかでは、彼らが最大の階層であった」¹⁸⁾、もっともさらに言えば、教養階層の中でも、むしろその周縁に位置する人々が多かったようである。すなわち、伝統的な「教養市民」の典型的・中核的集団たる官僚、聖職者、大学教授、医師、弁護士などよりも、ジャーナリストや国民学校教師などのようなグループである。急進民族主義の活動家には、『教育者としてのレンブラント』Rembrandt als Erzieher を著して、その思想的指針を確

立したラングベーン Julius Langbehn や、上記のヘンチェルのように、知識人とは言っても、社会的に一段劣る周縁的な層、あるいは「アカデミック・プロレタリア」などと呼ばれた人々が多く認められるようである¹⁹⁾。

改良運動を担ったのも、教養階層であった。そのような意味から、リンゼは、改良運動を「知識人の反乱」Gebildeten-Revolte と総括している。実際、デューラー同盟 Dürerbund (1902年設立) など、「知識人改良運動」Gebildeten-Reformbewegung と称される動きも確認される²⁰⁾。具体的に、生活改良運動を見てみると、たとえば田園都市運動の団体であるドイツ田園都市協会 Deutsche Gartenstadt-Gesellschaft (1902年結成) の場合、執行部に大学教授や講師が多数参加 (63人中29人) しており、その中の著名な人物としては、ゾンバルト Werner Sombart の名を挙げることができる。また、菜食主義運動にも、小自営業者などの旧中間層と並んで、知識層が多く加わっていた。デューラー同盟の個人会員は、九割以上が教養階層に属する人びとであった²¹⁾。

第二に、地域的に見て、運動がドイツの中でも中北部あるいはプロテスタント地域に偏っていたことがある。たとえば、帝政期の学生反ユダヤ主義組織であるドイツ学生同盟 Verein Deutscher Studenten を見てもよい。同盟が支部を置いていたのは、ベルリン、ライプツィヒを初めとして、主としてプロテスタントの北部ドイツの大学で、逆に南ドイツには拠点が少なかった²²⁾。一方、改良運動も、同様の地域的偏りをもっている。反アルコール運動や菜食運動は、圧倒的に北部のプロテスタント地域に集中していた。また、青年運動の一つたるワンダーフォーゲルも、プロテスタント系の青少年に支えられ、地域的には下ザクセン、テューリングン、ヘッセンなどの中部ドイツで盛んであった²³⁾。ドイツの宗教社会学的地図上、興味深い事実である。

第三に、世代的要因を挙げることができよう。一部の先駆者的な存在を

別にすれば、急進民族主義も改良運動も運動として確立していくのは、世紀末になってのことであった。この事実は、両者が共通の、ある一定の世代に支えられたという仮定を可能にする。改良運動の場合、こうした世代的要因はあまり明らかではないが、急進民族主義については、学生などの青年世代の存在が大きかったことは指摘されている。クラス Heinrich Bläß などはその典型だろう。帝政末期からワイマール全期を通じて全ドイツ連盟 Alldeutscher Verband の会長を務めたクラスは、急進民族主義者の代表格の人物だが、1868年に生まれ、ベルリン大学でトライチュケの講義を聴講してナショナリズムの洗礼を受けたのである。その後、1895年に弁護士として職業生活を始めるが、1897年に全ドイツ連盟に入会している。あるいは、ドイツ学生同盟の幹部ハーン Diederich Hahn も挙げておいてよいだろう。彼は、同盟が1881年に全国的レベルで挙行了した民族主義の祭典たるキュフホイザー祭 Kyffhäuserfest の開催実務を担当した活動家だが、後に急進的な主農派団体たる農業者同盟 Bund der Landwirte の幹部として活躍する。

以上、急進民族主義と改良運動の社会学的な背景を見てきた。それを要約すれば、両者の土壌となったのは北ドイツのプロテスタント世界であり、それを支えたのは主として青年知識層であった。最後に、こうした社会学的背景について、考察を加えておこう。

知識階層、とくにその周縁的部分が急進民族主義や改良運動に感応したのは、「教養市民層の危機」と呼ばれる事態と関係があろう。帝政期は、伝統的なドイツの教養階層にとっては没落の危機の迫りきた時代であった。それは、彼らの再生産機関たる大学が逢着した構造変化と密接につながっていた。すなわち、高等教育の量的拡大と社会的開放、さらに専門化・科学技術化の波である。

教養階層の危機は、第一に、その社会集団としての閉鎖性・同質性が失

われていったことに現れた。もともと、文化的エリートとして彼らが享受していた特権的な威信は、集団としての高い自己補充率と独自のサブカルチャーに基づいていた。しかし、帝政期に学生数が飛躍的に増加し、さらに有産市民や中間層の子弟の大学進出が進むと、学生の社会的相貌は多様化していく。こうして、教養階層の集団としてのまとまりは大きく損なわれたのである。

第二に、学生数の増加は、教養階層の従来からの労働市場を飽和させた。その結果、1890年代になると就職難が深刻化していく。大卒者の中には、従来の垣根を踏み越えて、経済的にはさほど有利ではない、新しい職業分野に流れ込む者も少なくなかったのである。

第三に、旧来の教養理念の意義の低下が挙げられる。ドイツでは、教養階層の存在を理念面で支えたのは、ギムナジウム以来の人文的「教養」Bildungの観念であった。ところが、学問の専門化・細分化が進むと、学問の哲学的一体性や、「教養」が保証していた科学と倫理の融合は不可能になっていった。加えて、工業化の進展は、自然科学的、技術的知識への需要を高めた。つまり、「実学」の比重が急速に高まってきたのである。こうして、古典的な教養理念は次第に影響力を失い、それに伴って、「教養市民」のアイデンティティを揺るがせたのである²⁴⁾。

没落への予感が、教養階層、とくにその周縁的な部分を苛んだのは、容易に想像できる。帝政ドイツの社会では、階層秩序が強固で、威信・地位の階梯を重視しただけに、その予感はいっそう切迫したものがあつた。疑似宗教的なイデオロギーは、こうした彼らの焦燥に強く訴えたものと考えられる。

次に、プロテスタンティズムとの関係である。この点については、ドイツ・プロテスタンティズムの特質に関する野田宣雄の指摘が参考になる。その見解を要約すると、以下のようになる。つまり、プロテスタントで

はカトリックと異なって、世俗化の進行が顕著で、とくに教養階層は、合理主義的神学の外観の裏側で、早くに宗教的関心を失った。他方、民衆は非知性的、現世妥協的な信仰に埋没した。その結果、社会の上下層の間に活発な「宗教的交互作用」が生まれず、そこに疑似宗教的運動が成立する空隙が生じたというのである²⁵⁾。

世代的要因については、次のように考えられよう。急進民族主義や改良運動を担った世代は、帝政ドイツの社会的現実の中に、いわば生まれ込んできた世代であった。彼らが青年に達する頃には、すでにドイツの工業化の離陸段階はとうに過ぎ、爆発的な経済成長の時代は過去のものとなっていた。したがって、その世代にとって、統一と工業化は自明の既成事実であった。他方で、1870年代半ば以降の「大不況」下の社会の陰鬱な気分の下で、社会問題など、近代化の負の側面が次第に人々の目につくようになってきた。こうしたなかで、現状への肯定より批判の気分が彼らを捉えたのは当然だろう。とくに急進民族主義の場合、1871年の「偉業」への参加の機会を逸したという焦燥が、平凡で無変化の日常への不満、あるいは「明らかな階層と落ち着いた推移とを持つ秩序づけられた世界」²⁶⁾への倦怠と相俟って作用した。

しばしば帝政期は、ワイマールの文化的栄光と政治的悲劇を担った「前線世代」との対比で、「戦前派世代」の時代と捉えられている²⁷⁾。しかし、急進民族主義と改良運動をめぐる問題は、帝政期「戦前派」の内部に世代間の相違と対立があったことを露わにしている。たしかに、ここで述べた青年世代は、ユンガー Ernst Jünger ら1890年代生まれと比較すれば、一世代年長であった。しかし、彼らは「前線世代」を先取りする一面を備えていた。1890年代以降の農業者同盟などの登場による保守・右翼勢力の急進化は、こうした新しい世代の登場という事情と関連していたものと考えられる。

4 おわりに

急進民族主義と改良運動は、その動機からして反近代主義であり、イデオロギー機能からして原理主義であった。一般的な観点からすれば、伝統社会が近代化と遭遇するときに不可避免的に生じる種々の摩擦の一つの現れと理解できよう。もっとも、その現れ方には、ドイツの政治文化的伝統が色濃く反映している。たとえば、両者とも、何らかの意味で社会変革を視程に入れているわけだが、変革の方法論は独特である。すなわち、両者とも「個人（あるいは精神）次元の変革から社会変革へ」という発想をとっているのである。そこには、ドイツの知識人に伝統的な私的逃避 *Privatismus* と社会的視野の欠落というロマン主義的特徴を見ることができ（る²⁸）。

反近代主義は、技術的・合理的近代への劣等感と反発というその本質からして、どうしても情念的・非合理的であり、また不定形で曖昧な輪郭をもたざるをえない。しかしながら、他方、不可逆的な歴史過程への絶望的な抵抗である以上、そのルサンチマンは、真の意味で満たされることはない。ルサンチマンそのものがやがてエネルギーを失って衰弱するのを待つか、あるいは代償的な充足に甘んじるしかないのである。とくに後者の場合、反近代主義が何らかの政治勢力によって利用され、その目的達成のために手段化される危険が生じる。原理主義としての政治的両義性が、そこでは振幅いっぱいまで振れることになる。

以上のような観点からすれば、近代ドイツにおける急進民族主義と改良運動を、近代化とそれへの反作用という、より広汎な一般史的な文脈で捉えることができよう。たとえば、近代への情念的な反発という点で、イスラム圏などに見られる、現代の種々の宗教的原理主義との対比を持ち出し、あながち突飛な思いつきとは言えまい。原理主義の一般的特質としては、1)伝統的な固有性への回帰を標榜し、2)政治・宗教・文化を含めた、

全体性を回復するよう主張し、3)西洋近代への反発・拒否をうたうもので、さらに社会的観点からすれば、4)社会経済的に脅威を受けた階層・集団の反抗現象であるという点が挙げられている²⁹⁾。本稿で取り上げた二つの運動は、本来の意味での宗教ではないが、こうした特徴を多少とも備えているのである。

19世紀末において、近代化の軋轢と大衆政治を社会的背景にして、過去への志向が新しい政治的・社会的機能を果たすようになったことは、すでに指摘されている。いわゆる「創られた伝統」である。たとえば政治的な面では、過去を共有すること（あるいは、共有するという虚構）は、国民の集団的アイデンティティを強化する役割を果たし、国民国家の凝集力を高めたのである³⁰⁾。しかし、伝統は、こうした「上から」の体制統合の手段としてだけ援用されたのではない。場合によっては、現秩序への反発を表現し、その改革を促す方向に作用するシンボルともなったのである。

急進民族主義と改良運動は、近代ドイツの政治文化を考えるうえでも、興味深い材料を提供している。われわれはまず何より、政治における宗教的（あるいは疑似宗教的）要素の役割について認識を新たにする必要がある。これは、ドイツ近現代史研究に宗教社会学の視点を導入した野田宣雄がすでに強調しているところである。すなわち、政治の場でも合理化がいよいよ浸透していく一方で、本稿で見たように、疑似宗教的な象徴や思考形式が、なお大きな意味をもっていたのである。

そうした実例は、ここで取り上げた二つにとどまらない。古くは、ウェーバーは社会主義を「経済的終末論的信仰」と呼んだ。リンゼの紹介するワイマール期の「インフレ聖者」は、知識階層よりも広範囲な大衆レベルでの現象だが、これも同じく政治における宗教的要素の根強い残存を証明している³¹⁾。あるいは、19世紀末のヨーロッパ各地の民衆運動に見られる千年王国運動の要素を、帝政ドイツについても確認できるかもしれない。

ドイツの経済的後進地帯で当時生じた反ユダヤ主義的な農民運動などは、その関連で興味ある対象である。もし、こうした運動が原理主義的な側面を備えていたと考えることができるなら、そこに一種の宗教的要素を想定することは決して無理ではあるまい³²⁾。

こうした宗教的要素は、程度の差こそあれ、他のヨーロッパ諸国の政治にも認められるものである。しかしドイツの場合、その背景要因として、やはりその近代化の独特のありようを考慮しておくことが必要だろう。つまり、近代化が急激に進められたために、それに伴う社会的摩擦がことに激しかったという事情である。その結果、宗教的帰依という絶対的な反発形態がより必要とされたのではないかと考えられるのである。

本稿で明らかにしたように、急進民族主義と改良運動は、イデオロギーとして相似しており、社会的に同根であった。むしろ、もともと別々のものというより、同一のものが異なる光の中に置かれたがために、異なったふうに映じたものと言うべきかもしれない。

両者は、通例は基本的に対比的なイメージの下で捉えられている。本稿で指摘した両者の共通の特徴は、こうした通説的理解からはみ出すものであり、またそのために、従来は特異な例外的事例だとして、十分に注意を払われてこなかった。しかし、これらが本質的特徴だったのか、それともやはり例外的な「はみ出し」だったかは、ここではこれ以上立ち入らないでおこう。非生産的な、一種の水掛け論になりかねないからである。むしろ注意したいのは、例外だと片付けることで、急進民族主義と改良運動を過度に対極的なものと把握してしまうという陥穽である。その場合、両者に通底する部分は容易に看過されてしまうことだろう。

現代史のアポリアの一つは、一個の思想の中にしばしば革命と復古が同居することである。一次元的に左右に走る政治的立場のスペクトルを想定し、その上に種々の思想を位置づけるという古典的手法では、もはや整理

がきかなくなっている。現代史のねじれた政治空間では、いわばスペクトルの両端が接合しているからである。ドイツ現代史では、こうした現象はとりわけ「保守革命」論に顕著に現れている³³⁾。ワイマール期に盛んになった「保守革命」論は、本稿で取り上げた急進民族主義の開花したものであるが、この語自体、上記のアポリアの典型的な事例である。

本稿は、そうしたスペクトルを解体して、アポリアを状況論に解消しようとしている。こうした考え方は、シニカルな相対主義ととられるかもしれない。あらゆる立場を同一の次元に引きずりおろすからである。しかし他方で、スペクトルの背後には、往々にして歴史研究者が暗黙のうちに研究対象に投射した価値的姿勢が潜んでいることも事実である。したがって、そうした固定的観点を解消することだけでも、新たなアプローチに道を開いておくという点からすれば、意味のあることだと考える。

冒頭で触れたことだが、急進民族主義も改良運動も、全体としては帝政期の知識人の一部を捉えたにすぎなかった。知識階層の大部分、あるいは正統的な「教養市民」は、帝政の政治的・社会的な現秩序と進んで共生していたのである。もっとも、ワイマール期に入ると、急進民族主義勢力は目覚ましい成長を見せ、他方、文化改良運動、青年運動などからはワイマール文化の担い手が生まれた。その意味では、本稿で取り上げた動きは、いわばヴィルヘルム期の「対抗文化」であり、あるいはゲイの言う、ワイマールを形成した「アウトサイダー」に支えられたものであった³⁴⁾。

だからといって、それが帝政期の社会の中でまったく例外的な孤立した現象だったわけではない。もっと漠然とした気分、雰囲気としてであれば、正統派の「教養市民」の間にも、近代に対する反発は深く根付いていた。リンガーは、それを「読書人イデオロギー」と呼んでいる。つまり、一種独特な意味合いでの「文化」への傾倒、功利主義・合理主義への懐疑、「個性」や「世界観」などの非合理的要素の称揚、西欧に対する反発など

である。これは、大学を中心とした知的世界の牢固とした非自由主義的規範によって、いっそう強められた³⁵⁾。つまり、反近代化心情は、帝政期の知的世界の「公理」であり、知識人の風土病的特徴となっていたと言えよう。まさしく彼らは、「大衆社会、民主主義、自由主義、近代……を非難する修辞」を共有していたのである³⁶⁾。

同時に、さらに視野を広げて言えば、近代の翳りが濃くなりつつあった世紀末の思想状況も想起しておいてよいかもしれない。それは、広く全ヨーロッパ的広がりをもった潮流だったが、ドイツに関して言っても、新カント派、現象学、生の哲学からユーゲント・シュティールや表現主義、ダイズム、さらには物理学の相対性理論にいたるまで、「実証主義的リアリズムへの批判、それからの離脱の方向の模索」が、様々の形をとって噴出した³⁷⁾。このように、渾たる情念の次元であれ、あるいは高度に自覚的な思想的次元であれ、近代への疑念は知的世界に広く根を張っていたのである。

そうだとすれば、急進民族主義や改良運動に現れた動きは、近代ドイツの知識階層が共有していた姿勢が、一種先鋭な形で表面化したものにほかならない。その意味では、この二つの運動は、帝政期の政治社会の特質をかなり忠実に映し出していたのである。

注

- 1) 本稿の立論の素材となる事実は、次の概観的な研究文献に負うところが大きい。すなわち、帝政期の急進民族主義については、G. L. Mosse, *The Crisis of German Ideology. Intellectual Origins of the Third Reich*, (New York) 1964. また改良主義の中心となる生活改良運動については、W. R. Krabbe, *Gesellschaftsveränderung durch Lebensreform. Strukturmerkmale einer sozialreformerischen Bewegung im Deutschland der Industrialisierungsperiode*, (Göttingen) 1974; J. Frecot, "Die Lebensreformbewegung", in: K. Vondung (Hg.), *Das wilhelminische Bil-*

dungsbürgertum. Zur Sozialgeschichte seiner Ideen, (Göttingen) 1976.

- 2) 「急進民族主義」という言葉では、普通名詞化されすぎて、このイデオロギーのもつ独特の内容は十分には表現できていないくらいはある。それにもかかわらず、「民族至上主義」という訳語や、専門研究者の間ではむしろ通りのよい「フェルキッシュ」の語を敢えて使わなかったのは、単に日本語としてのこなれ具合の問題や、カタカナへの単なる音声的な置き換えを避けるというだけにすぎない。
- 3) 改良運動に関する邦語文献は、管見のかぎりでは非常に少ない。上山安敏『世紀末ドイツの若者』(三省堂)1986年、194頁以下参照。それ以外には、反アルコール運動を扱った工藤章男の論文が挙がる程度である。同「19世紀ドイツ市民社会と「アルコール問題」——市民的生活規範の拡張——」『文化史学』(同志社大)45(1989)。
- 4) こうした一括化には、否定的な見解もないわけではない。Vgl. J. Reulecke, “Wo liegt Falado? Überlegungen zum Verhältnis von Jugendbewegung und Heimatbewegung vor dem Ersten Weltkrieg”, in: E. Klueting (Hg.), *Antimodernismus und Reform. Zur Geschichte der deutschen Heimatbewegung*, (Darmstadt) 1991. だが、これらの運動が、どういう意味であれ、一個の何らかのまとまりをもっていたことは否定できない。
- 5) ドイツにおいてのみならず、エコロジー運動が改良運動といかに縁の深いものだったかは、その歴史のいたるところに見て取れる。エコロジー運動の思想史として、A. ブラムウェル『エコロジー——起源とその展開——』金子務監訳(河出書房新社)1992年、とくに第5、第6章参照。
- 6) A. Mohler, *Die konservative Revolution in Deutschland 1918-1932*, (Darmstadt) 1994, S. 27, 29.
- 7) Krabbe, *a. a. O.*, S. 77.
- 8) 野田宣雄『教養市民層からナチズムへ——比較宗教社会史のこころみ——』(名古屋大学出版会)1988年、63頁。
- 9) K. v. Klemperer, *Germany's New Conservatism. Its History and Dilemma in the Twentieth Century*, (Princeton, N. J.) 1957, S. 48.
- 10) K. Vondung, “Deutsche Apokalypse 1914”, in: ders. (Hg.), *a. a. O.*
- 11) Krabbe, *a. a. O.*, S. 169.
- 12) Mosse, *a. a. O.*, S. 113ff.

- 13) Krabbe, *a. a. O.*, S. 124ff.
- 14) フリッチュについては、竹中亨「反近代的社会改革と原理主義 — 帝政ドイツ反ユダヤ主義の歴史像 —」『西洋史学』173 (1994), 5頁参照。
- 15) Krabbe, *a. a. O.*, S. 147f.
- 16) さしあたり、中村幹雄『ナチ党の思想と運動』（名古屋大学出版会）1990年参照。
- 17) H. A. Winkler, “Der Nationalismus und seine Funktion”, in: ders. (Hg.), *Nationalismus*, (Königsstein/Ts.) 1978; ders., “Vom linken zum rechten Nationalismus. Der deutsche Liberalismus in der Krise von 1978/79”, in: ders., *Liberalismus und Antiliberalismus*, (Göttingen) 1979.
- 18) Mosse, *a. a. O.*, S. 150f.
- 19) F. Stern, *Cultural Despair*, S. 98ff.; Mosse, *a. a. O.*, S. 113.
- 20) U. Linse, “Die Jugendkulturbewegung”, in: Vondung (Hg.), *a. a. O.*, S. 119; G. Kratzsch, *Kunstwart und Dürerbund. Ein Beitrag zur Geschichte der Gebildeten im Zeitalter des Imperialismus*, (Göttingen) 1969, S. 28.
- 21) Krabbe, *a. a. O.*, S. 30, 140; Kratzsch, *a. a. O.*, S. 337.
- 22) N. Kampe, *Studenten und “Judenfrage” im Deutschen Kaiserreich. Die Entstehung einer akademischen Trägerschicht des Antisemitismus*, (Göttingen) 1988, S. 31.
- 23) Krabbe, *a. a. O.*, S. 39, 141. W. ラカー『ドイツ青年運動 — ワンダーフォーゲルからナチズムへ —』西村稔訳（人文書院）1985年、25頁。青年運動については、さらに望田幸男／田村栄子『ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち — 青年・学校・ナチズム —』（有斐閣）1990年、134-175頁、田村栄子「世紀転換期教養市民層の危機と自由ドイツ青年の思想 — 「教養」・「フォルク」・「文化」理念の社会史的考察を中心に —」『静岡英和女学院短大紀要』27 (1995), 八田恭昌『ヴァイマルの反逆者たち』（世界思想社）1981年、26-44頁参照。
- 24) K. H. Jarausch, *Students, Society and Politics in Imperial Germany. The Rise of Academic Illiberalism*, (Princeton) 1982; ders., *Deutsche Studenten 1800-1970*, (Frankfurt a. M.) 1984.
- 25) 野田、前掲、37頁など。
- 26) S. ツヴァイク『昨日の世界』原田義人訳（みすず書房）1973年、第1巻、49頁。

- 27) 脇圭平『知識人と政治 — ドイツ・1914～1933 — 』(岩波書店)1973年、111-112頁。ヴィルヘルム期の世代問題については、さらに D. J. K. Peukert, “Mit uns zieht die neue Zeit...’ Jugend zwischen Disziplinierung und Revolte”, in: A. Nitschke u. a. (Hg.), *Jahrhundertweide. Der Aufbruch in die Moderne 1880-1930*, (Reinbek) 1990, Bd. 1; J. Reulecke, “The Battle for the Young. Mobilising Young People in Wilhelmine Germany”, in: M. Roseman (Hg.), *Generations in Conflict. Youth Revolt and Generation Formation in Germany 1770-1968*, (Cambridge) 1995 参照。
- 28) T. Parsons, *Democracy and Social Structure in Pre-Nazi Germany*, in: ders., *Essays in Sociological Theory*, (Glencoe) 1954, S. 120. ドイツ知識人の観念世界をエッセイ風に描写したものとして、H. Glaser, *Bildungsbürgertum und Nationalismus. Politik und Kultur im Wilhelminischen Deutschland*, (München) 1993 参照。
- 29) 井上順孝他編『ファンダメンタリズムとは何か — 世俗主義への挑戦 — 』(新曜社)1994年、183頁。
- 30) E. J. ホブズボーム他編『創られた伝統』前川啓治他訳(紀伊国屋書店)1992年。
- 31) M. ヴェーバー『宗教社会学』武藤一雄他訳(創文社)1976年、173頁、U. リンゼ『ワイマル共和国の予言者たち — ヒトラーへの伏流 — 』奥田隆男他訳(ミネルヴァ書房)1989年。
- 32) ちなみに、ホブズボームが挙げている千年王国運動の三つの指標は、1)現世総体を邪悪と捉え、それを全面拒否しようとする革命主義、2)終末論的なメシア待望、3)変革手段の不明確さ、非合理的性の3点である。同『反抗の原初形態 — 千年王国主義と社会運動 — 』青木保編訳(中央公論社)1971年、30-31頁。そうした農民運動の一例としては、竹中亨「一九世紀末ヘッセンの反ユダヤ主義農民運動」『史林』64-1(1981)参照。
- 33) 保守革命論については、Mohler, a. a. O. 邦語文献としては、K. ゾントハイマー『ワイマル共和国の政治思想』河島幸夫他訳(ミネルヴァ書房)1976年、蔭山宏『ワイマル文化とファシズム』(みすず書房)1986年など参照。
- 34) P. ゲイ『ワイマル文化』到津十三男訳(みすず書房)1970年、7頁。
- 35) F. K. リンガー『読書人の没落 — 世紀末から第三帝国までのドイツ知識人 — 』西村稔訳(名古屋大学出版会)1991年、iii頁。R. Dahrendorf, *Gesellschaft und Demokratie in Deutschland*, (München) 1968

(Nachdr.: München 1971, S. 165ff.).

36) F. Stern, *The Failure of Illiberalism. Essays on the Political Culture of Modern Germany*, (Chicago) 1971, S. 18.

37) 生松敬三『二十世紀思想涉獵』(青土社) 1881年、191頁。

(文学部助教授)